

【社会科】教科提案

一人一人の学びの充実をめざして ～ ひとり学習を全体学習の場面へ ～

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかかわって

「問い続け、学び続ける子どもたち」とは、主体的に学びを深めていき、社会科のねらいに自ら近づいていける子どもたちのことである。これは、土台となる学級風土の中で育まれていくものである。

まず、単元の中でめざす子どもたちの姿とは、見通しをもって学習に取り組んだり、課題を見いだして追究したりしていく姿である。そのためには、魅力的な教材づくりや課題設定が必要である。単元や課題を工夫することで、子どもたちが学ぶ筋道を考えようとするきっかけをつくっていくのである。そうすることで課題解決意識が高まり、ひとり学習が深まると同時に課題に向かう学級風土も育まれていくのである。社会科の学習内容は、主として現代社会の事象を取り上げるため、より具体的・直接的に現代社会とかかわり合う。事象を単に知識として獲得するだけではなく「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかかわらせる中で認識される。そして、追究していく過程を通して深化させていくのである。自ら追究する中で獲得していった知識は、単に知識の増加にとどまらず、知識を獲得するための筋道や学び方をも体得するはずである。そのために、教師は一人一人の子どもによりそいながら、学習意欲やそれぞれの課題意識を高めていく支援が重要となる。例えば「子どもたちは、今どのようなことに興味・関心をもち、追究しようとしているのか」とか「この子は、この問題をどうとらえどのように対象に向き合うだろうか」という視点が必要となってくる。子どもたちはその追究の過程を通じて知識・理解を獲得し、よりよく課題を解決する方法や能力を身につけていくのである。

単元全体を通して、その個の変容を探っていくためには1時間1時間の授業についてもその学びを丁寧にみていく必要がある。ここで大切にしたいことは、子どもの気づきを見逃さないようにすることである。そして、いくつかの気づきから子どもたちによる焦点化を支援し、課題解決へと向かわせたい。どの場面においても「問い続け、学び続ける」ことは、教師のみとりと支援が重要である。教師は学習意欲を刺激し、方向づけ、学習活動を支援する存在でなければならない。

(2) 社会科でめざす子ども像

社会科の究極的な目標は、社会生活を営んでいくために必要とされる「公民的資質の基礎を養う」ことである。一人の人間として社会に対してどうかわかり、社会生活の中で自分はどのように生きていくかを考え、社会の中で望ましい行動がとれるようにすることである。これは子どもたちに自分なりの「社会的なものの見方や考え方」を育てることと関連している。したがって社会科学習では「社会的なものの見方や考え方」を身につけるようにするために、社会的事象に主体的にかかわらせていくことが大切である。

そこで、「社会科教育を通してめざすべき子どもの姿」を、次のように設定した。

A：事実を的確にとらえ、こだわりをもちながら学習をすすめていける子

B：社会的事象への公正な判断力を持ち、未来への生き方につなげられる子

Aの「事実を的確にとらえ」とは、事実に基づいて見たり考えたりすることである。様々な社会的事象から具体的な事実を的確に読み取ることが大切である。子どもがもっている社会的事象に対する見方や考え

方は多様であり、それは、既習内容の理解や生活体験の差異に由来する。「こだわりをもちながら学習をすすめる」とは、社会的事象に対して疑問を抱くことも含め、自分なりに解釈（意味づけ）して考察することである。新たな社会的事象と出合ったときに、他者の考えと自分の考えを比較したり、共感、深化したりする場を全体学習ととらえている。全体学習の中で、一人一人が友だちとのかかわりながら、自分の思いやこだわりをもって学習をすすめることにより、社会的事象をより総合的に把握したり考察したりすることができると思う。

Bの「社会的事象への公正な判断力を持ち」とは、社会的事象を一面的に理解することとどまらず、多角的・多面的にとらえることで、事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育むことである。社会的事象の多くは、立場を変えて見れば当然異なる見解が生じるものである。多角的・多面的にとらえることで、より広い視野から考察・判断でき、子どもの中に個性的な見方や考え方が育っていく。また、自分の見方や考え方を表現し合い、友だちと比較・交流することによって、より公正かつ総合的なものの見方ができるようになる。「未来への生き方につなげられる子」とは、自分が生活している社会に深い関心や愛着を持ち、それをもとに自分なりの未来の生き方を描き出すことである。社会的事象を自分の生活や自分自身とのかかわりの中で見たり考えたりすることで、自分の考えや夢をより広げ、自分なりの生き方や生活の改善につなげていけるのである。そして“自分にとっては”“自分ならば”など、自分を社会とのかかわりの中で見つめ直し、未来への生き方につなげていくことができる子に育ってほしいと願っている。

2. 社会科における「問い続け、学び続ける子どもたち」

社会科学習の具体的なねらいは、子ども自らが課題意識をもって意欲的に学ぶ態度をはじめ、自分なりに思考し判断しながら問題を解決する力や自分の言葉で表現する力、学習の成果を自らの生活向上に生かす力などを身につけさせることである。社会的事象を単なる知識として理解するだけでなく、社会的事象を多角的・多面的にとらえることで総合的に判断することが重要である。

このようなねらいを達成し、社会科学習を一層意義深いものにしていくために、全体学習と同様にひとり学習を大切にしたいと考えている。全体学習は考えをすり合わせ練り合う場であり、ひとり学習を発展させる場でもある。全体学習はひとり学習のために、ひとり学習は全体学習のために相互に関連しあいながら位置づけられるのである。「ぼくは〇〇だと思う」「わたしは、〇〇についてこんな疑問をもっている」というように、学習対象に対して個人の思いをしっかりとつことから、ひとり学習がスタートする。学習対象と出合い、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究活動をすすめるが、このとき教師は、誰がどんな事を調べ、どのように資料作りをしているのかを確実に把握しておくことが大切である。また、自分の疑問を解決できない子に対し、調べ方や考え方を助言することもある。ひとり学習をすすめることは、地図やグラフなどの具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や関連などについて考える力、調べたことを自分なりに表現する力を伸長させることにもつながると考えている。

社会科では、特に1時間の学習の中で「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿を提案していきたい。全体学習で話し合いが始まると、いろいろな考えが出てくる。友だちの考えをしっかりと聴き、自らの思いを出し合う中で、「なるほど、そんな見方や考え方があるんだね」と友だちの考えに共感することや、「ぼくと〇〇さんとは考えがちがうようだから、◇◇を用意して、もう一度ぼくの意見を言い直してみよう」というように、学習対象に対する自分の考えを見つめなおすきっかけになり、新たなひとり学習の課題が設定されることが多い。このように子どもたちで相互に刺激し合い、友だちの考えを知る中で問いや自分の考えを一層深めることは、社会的事象や課題を公正かつ総合的に判断する力を育てる上でも大切である。また、友だちの知識や考えを比べたり・つなげたり・まとめたりすることで、考えや思いを再構成し、具体的な事実に対する理解が深まるのである。

(1) 社会科におけるみとりと支援

社会科における着目児とは単元を見通して設定する。単元で変容を期待する子、単元とかかわりの深い子、課題意識の高い子などが考えられる。単元をすすめていく中で、着目児の変容を追いながら、子どもたちが「ひと・もの・こと」とどうかかわっていくかをみとっていく。課題に対して着目児のアプローチの仕方をみとることによって、子どもたちが問い続け、学び続けていけるように支援していく。そのために、日々の子どもの様子を記録して貯めていくカルテ、子どもの考えを記録した作文、授業記録、座席表などで個の学びみとり、支援していく。座席表には、カルテを通してみとって子どもの変化や様子と作文や授業記録などをもとにした子どもの考えと子どもと子ども、そして子どもと課題の関係性を記録していく。

課題意識を深化していくためにも、一時間の授業におけるみとりに焦点をあて研究していく。教師は、学級全体で課題解決へと近づけていくために子どもの考えを把握する。子どもたちの考えを把握し、整理しながら、どの子の考えをとりあげれば学びが深まるのかといった視点を持ち、子どもたち自ら焦点化する話し合いができるよう個に応じた支援も大切にしていきたい。

(2) 社会科における「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿

学びを追究する子ども
○問いに基づいて、見通しをもって対象・他者・自己に自主的に働きかける
○自分のハテナを他者と対話していくことで追究の見通しがもてる学習課題を見いだす
○ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことをもとに、考えを創ったり広げたりする
他者との関わりを大切にする子ども
○仲間のものの見方・考え方を受けとめ、それまでの自分の見方・考え方をふり返る
○自分と仲間の考えを比べたり、つなげたり、まとめたりすることで、考えや思いを再構成する
学びを実感する子ども
○自分の学びや仲間との学びをふり返り、自己の変容や成長や学びに対する新たな価値や意義を感じる
○ひとり学習や全体学習を通して、考えや思いを再構成し、具体的な事実に対する考えを深める

(3) 3年生「附属小学校のまわりのようす」から

課題「なぜFはお店の場所がかわってお客さんがふえたのだろうか。」（一部授業記録抜粋）

しょうき：ここらへんに、家があったりして、横にある店に入って定員さんにきいたら、前はわざわざここに行かなあかんかったの、自分とこで食べていたけど、ついでは買って帰ろうという感じで。お弁当に・・・
T：前の時は？
しょうき：今やったら、横やからばって買って、おやつとか小腹すいたときに食べる。
T：インタビューした人は何て言っていましたか。
みか：今のファミマの近くに病院があつてお見舞いに来た人たちは、買っていくから多くなったって言っていた。
ゆうき：店員さんに、1日にどれくらいお客が来るか聞いてみたら、多いときは1000人ほどで、少ないときは300人でした。
はざま：聞きたいことある。何も買わない人をまぜて1000人なのか、買った人だけで1000人なのか。
ここ：そりゃ、店員さんやったら買った人数える。

多くの子どもが友だちの意見を聞き、考えを深めたり変えたりした。このように、他者の意見に触れ自己の考えを更新・変容し、問い続け、学び続けようとする子どもの姿が、本時の中で見られた。コンビニエンスストアFの場所が変わったことでなぜ売上が増えたのかを考えることを入口として、附属小学校のまわりの特徴について考えることができた。コンビニエンスストアFの店長さんやインタビューに答えてくれた多くの方々が、学習を高めてくれ、子どもたちにとって大きなエネルギーとなった。出会いによって人々の願いや工夫を知るきっかけになった。また、様々な活動を通して、自分の思いや考えに根拠をもつことができた。そして、いろいろな立場の人と接し、学校だけでなく現実の社会とのつながりをもったことで、対象・他者との対話をすることができた。そして、自分の考えを吟味することができ、地域社会に対する誇りと愛情を持とうとする変容が見られた。単元を通し個人の振り返りカード、作文等の活用により、他者との見方・考え方の違いや自分自身の見方・考え方の変容にも気づくことができた。

3. 研究の展望

ひとり学習と全体学習を交互に取り入れる社会科学習を、より充実させるための重要なポイントとして次の3点を研究の視点とした。

(1) 学習単元の開発と充実 学習課題とのかかわり

子どもたちが興味・関心をもつような活動や調査見学を取り入れた単元計画が必要である。また、他の友だちとの学びの交流を考慮した学習課題が大切である。学習課題とは、子どもたちの問題意識からスタートし、“相互の刺激”をしながら深化、発展していくものである。学習課題と出合ったとき、子どもたちは様々な疑問をもちながら追究をはじめ、問題解決への追究の見通しがもてる切実感のある学習課題でなければならない。

(2) ひとり学習における子どもの変容

学習課題と積極的にかかわっていくと、ひとり学習の問題意識が深まっていく。指導者にとって一人一人のみとりと支援が特に重要になってくる。ノートや作文、発言から個々の学びをみとり、子どもたちの変容を把握しながら単元構成にかかわっていきたいと考えている。個に応じた支援をすることで、子どもたちが調べてきた様々な考えをつなぎ、焦点化しながら全体学習をつくっていく。

(3) 子どもの関係性をとらえる

ひとり学習で調べてきたことや考えてきたことを全体学習で他者と対話させる中で、一人一人の学びの質を高めることができる。日々の授業や生活の様子を座席表などで記録してきたことをもとに子どもの関係性をとらえた上で、対話学習では、ともに学び、練り合う場面を特に大切にしたいと考えている。

4. 研究の評価

自分の思いや考え方の根拠となる資料等を、ひとり学習でみとるとともにその変容を把握する。様々な活動におけるノートや作文等で、個々の学びをみとり評価する。全体学習では、話し合い活動を通して、対話の深まり方を探り、評価する。子ども自身が学習を振り返る作文で、公正かつ総合的に判断する力が育っているかを評価する。単元の導入と終末には作文を書いて、自ら変容を意識し、確かめるようにしている。また、学びの足跡を掲示したもので確認したり、個々でファイリングしたりすることで、新たな課題を見つけて学びを深めている。